熊本大学デジタルアーカイブシンポジウム

概要

日時：2020 年 11 月 21 日（土）10:00～12:00

参加者数：25 名

開催方法：ZOOM でのオンライン形式

概要：2 部構成で開催し，第 1 部は信州大学廣内教授と熊本大学竹内准教授の講演，第 2 部はパネルディスカッションを行った．

プログラム

【第 1 部　講演】

○講演 I

「震災の記憶をどう受け継ぐか　～2014 年長野県神城断層地震震災アーカイブの取り組み～」

廣内大輔（信州大学教育学部　教授）

○講演 II

「３つの「つなぐ」をめざして～熊本大学デジタルアーカイブ「ひのくに災史録」の構築～」

竹内裕希子（熊本大学デジタルアーカイブ室長・熊本大学先端科学研究部　准教授）

【第 2 部　パネルディスカッション】

「デジタルアーカイブ構築工夫と活用の課題」

○登壇者

岩崎進之介（熊本県知事公室参事）、本間喜子（信州大学助教），山尾敏孝（熊本大学名誉教授），熊本大学学生（古賀，水上，小溝，三浦）

○司会進行

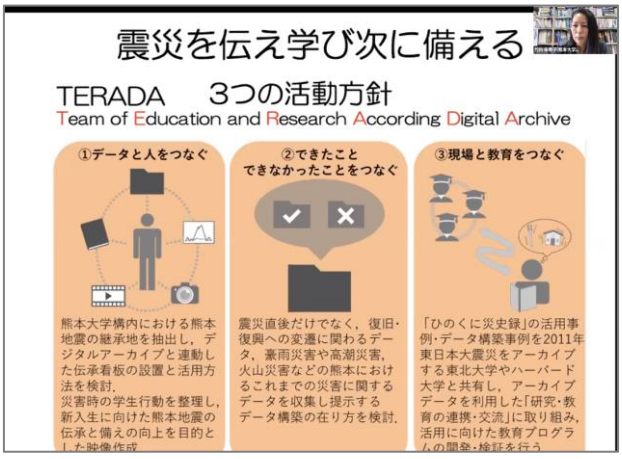
田中尚人（熊本大学熊本創生推進機構准教授）

内容

講演では廣内教授から，信州大学における 2014 年長野県神城断層地震の震災アーカイブの取組みが紹介された．その後，竹内准教授からは熊本大学デジタルアーカイブ「ひのくに災史録」の活用を行う団体「TERADA」について説明があった．

災害カレンダーの作成に取り組む TERADA の学生たちからは，「誰に，何を伝えるのか，を考えることが難しいけれど，楽しい」というコメントがあった．本間先生からは，実際に地域の方々とアーカイブを活用する際の苦労，「家族を守る」という一見当たり前のインタビューの題材や，きっかけづくり，民間会社との上手なコラボレーションなど，様々な知見をご教授頂いた．参加者（オンラインなので遠くはオーストラリアまで）からの対話も交え，「誰のために，誰が，何を，どのように伝えるのか」これからも，私たちは考え続けていく必要がある，ということがよく分かったシンポジウムであった．今後，熊本県，市町村との協働や民間，地域住民の方々との協働などについても，真剣に取り組んでいく必要があるという示唆が得られた意義深いシンポジウムとなった．

震災アーカイブについての説明（廣内教授）



TERADA の活動方針（竹内准教授）